九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『狭衣物語』の本文研究

閻，紹婕

https://hdl.handle.net/2324/4474904

出版情報：九州大学，2020，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：閻　紹婕

論 文 名　：『狭衣物語』の本文研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

『狭衣物語』は、後世『源氏物語』と併称された作り物語の傑作である。近代以前に異本の淘汰が行われずに伝来したため、『源氏物語』などに比べ諸本の本文異同が大きく、現存テキスト間の本文の対立の激しさに特徴がある。このため、『狭衣物語』研究においては本文批評が大きな問題となっている。本論文では、その本文研究の一翼を担うべく、近年批判される傾向にある深川本について、深川本が最善本とは言わないまでも、その本文が他系統のものより優位性があることを改めて確認した。また、『枕草子』や『古今和歌集』などの引用により、異文が発生したことも明らかにした。さらに、藤原定家の撰した『物語二百番歌合』（百番歌合）を手がかりとして、藤原定家所持の『狭衣物語』の本文の様相を還元し、それは深川本とかなり異同があるため、中世における『狭衣物語』本文の様相解明にも一石を投じた。

第一部概説篇で研究の背景および目的、着眼点などを説明し、第二部研究篇の第一章から第五章にて『狭衣物語』において問題点となる場面を取り上げて具体的な検討を行い、第六章で全体の総括を行った。第三部資料篇には九州大学附属図書館蔵細川文庫本『さころも』の解題と翻刻（第一帖）を付した。

以下、第二部研究篇の各章の概略を述べる。第一章では、『狭衣物語』の「蝉の黄葉に鳴いて漢宮の秋なり」を朗詠する場面が『枕草子』の一段に影響を受けたことを確認し、当該章段がこれまで重要視されなかった類纂本系統の前田家本と堺本にしか存在せず、また、前田家本の本文が『狭衣物語』の当該場面により近いことを論証した。また、該当場面の異文生成は、享受者が『枕草子』の影響を意識せずに道理的な表現へと変えていったことによる。このような異文からは本文の本来の姿が見えづらくなり、作者の原意も隠れていった。『狭衣物語』の作者は、自分の教養を駆使することで文学的な香気に溢れた豊かな作品に仕上げ、また、『枕草子』の情趣的な面を継承しながら、斬新な表現世界を創出したのである。

第二章では、『枕草子』の受容状況を検証しつつ、異本文学論の視点から『狭衣物語』の当該場面の対立本文の表現原理が明らかにした。天稚御子降下の翌朝の場面に関して『枕草子』の冒頭と「鳥は」段に影響関係があることが先行研究で指摘されたが、実は該当場面の第一系統本と他本には大きな違いが見られる。第一系統の深川本では、『枕草子』の冒頭の受容態度及び時鳥の役割が他の場面と一貫性を持っており、深川本の該当場面のほうが優位性を持つ。また、『狭衣物語』の文章表現が従来の先行作品と多くの共通点を持つという事実は一般に認められているが、例えば冒頭における斬新的な趣向などは、必ずしも前蹤の模倣だけではなかった。深川本では、『枕草子』の影響はなく、和歌で培われた伝統的なイメージを踏まえ、単なる模倣

の域を越えた新たな表現方式が創出され、それによって狭衣の内面と行動が展叙されていく。他本では、和歌に培われた伝統的なイメージを継承しつつ、素朴な素材継承論を織り込む形式の記述がなされ、擬人化による心情表現が読者や享受者に親近感を与える効果を生み、本文が広く流布された。

第三章では、弥勒信仰と阿弥陀仏信仰という二つの意匠を物語に取り入れた理由や効果を観察し、物語の形成に果たした役割を探ることを通して、狭衣という人物の位相について確認した。『狭衣物語』巻一において、深川本を代表するいわゆる第一系統本には、他本に見られない弥勒信仰と関わる法文を狭衣が口ずさみ、兜率往生の願望を述べる記述が見られ、他巻においても女二宮による兜率往生の記述が見られる。一方、堀川大殿、嵯峨院などは、兜率往生ではなく極楽往生と語られている。それぞれの場面において諸伝本には大きな異同も見られる。その本文の改変と異文の生成は当時の仏教歴史と仏教思想に関係があり、享受者の理解と思考が本文生成に影響を与えた。

第四章では、和歌に注目した。藤原定家の撰した『物語二百番歌合』は『百番歌合』と『後百番歌合』から成り、古くよりこの歌合は、散逸物語の本文調査や定家所持の『源氏物語』の本文を探る対象として取り扱われてきた。一方、定家所持の『狭衣物語』の本文の様相はまだ不明のままであり、問題が残っている。そこで、『百番歌合』が収録した『狭衣物語』巻一の二八首（詞書を含めて三十首がある）の歌と現存する諸伝本とを対照し、『物語二百番歌合』が依拠した『狭衣物語』が三条西家本と近似することを確認した。現存の三条西家本は室町末期の成立と推定され、巻一しか現存しないという問題はあるが、『後百番歌合』に収録した『源氏物語』の一例が諸本と一致せず、三条西家本『源氏物語』のみと一致するため、三条西家旧蔵書が定家と関係のあることが窺える。

第五章では、日本文学において、物語、日記および和歌に複数の使用が認められる「蕭蕭暗雨打窻聲」（蕭蕭たる暗雨窓を打つ声）という一句を典拠とする表現に注目して考察をした。まず中国文学において「雨打窓聲」の場面がどのような場面で用いられているのかを確認した。『狭衣物語』において、他の作品とこの漢詩の受容様態が異なるようである。『源氏物語』などでは漢詩を典拠とする表現が原漢詩と共通した場面で用いられるのに対し、『狭衣物語』では原漢詩の場面と乖離した場面で用いられており、単なる修辞として用いられたと考えられる。引歌表現は、装飾的な文章表現として用いられる一方で、悲しい雰囲気を引き立たせるという働きもあり、後の悲劇を暗示するものとなっている。原漢詩文の場面を変容させ、物語を盛り上げる効果をもたらすための苦心の跡が見て取れる。このことは、当時すでに「蕭蕭暗雨打窻聲」（蕭蕭たる暗雨窓を打つ声）という漢文表現が和文化・符号化され、引歌表現として使われていたことの証しであると結論付けた。

『狭衣物語』の本文研究は未解決の問題がまだ多く残されており、本研究は『狭衣物語』の本文研究に光を当てたにすぎない。今後はより多角的な視点からのアプローチが求められる。ここまで行ってきた考察を持って、これまで国文学で積み重ねられてきた『狭衣物語』の本文研究の発展に新たな視点が提供できれば幸甚の至りである。